

大坂城三ノ丸における屋敷跡の発見と現地説明会の開催について

調査成果の説明

はじめに

公益財団法人大阪府文化財センターは、平成 30 年 11 月より国土交通省近畿地方整備局による大阪第 6 地方合同庁舎（仮称）整備等事業に伴い、大阪府中央区大手前三丁目地内で、1,866 m²の発掘調査を実施しております。調査地は大坂城跡に該当します。

1. 大坂城の概要

大坂城は、大阪平野にのびる上町台地の先端に位置しており、この地は数々の歴史の表舞台に登場します。大坂城の下層には、一向宗の本拠地であった石山本願寺があったと推定されています。石山本願寺は織田信長との石山合戦の末、天正 8（1580）年に紀州へ移ります。その織田信長が本能寺の変で倒れた後、羽柴秀吉が天正 11（1583）年大坂城築城に着手します。

天正 13（1585）年本丸が完成し、この年秀吉は関白に任ぜられます。天正 16（1588）年二ノ丸が完成。文禄 3（1594）年に惣構の築造を開始し、さらに慶長 3（1598）年には三ノ丸築造を開始しましたが、この年秀吉が没します。

その後、慶長 5（1600）年の関ヶ原の戦いを経て、慶長 8（1603）年徳川家康が征夷大將軍に任ぜられ、江戸幕府を開きます。家康は、方広寺鐘銘事件を発端にして大坂討伐を開始し、慶長 19（1614）年に大坂冬の陣がおこります。大坂冬の陣では、徳川方は惣構を突破することができず、和睦を結ぶこととなりました。徳川方は、和睦の条件として惣構と二ノ丸の堀の埋め立てを行います。その際、家康は徹底した堀の埋め戻しを命じています。翌慶長 20（1615）年に家康は再び大坂討伐を開始し、大坂夏の陣がおこります。難攻不落を誇った大坂城も、堀を失ったことにより、ついに落城し灰燼に帰しました。

その後、元和 6（1620）年に徳川幕府により大坂城再築工事が始まります。この工事では、豊臣大坂城の面影を完全に払拭するような大規模な盛土を行い、寛永 6（1629）年に完了しました。この結果、豊臣大坂城は地下深く眠ることとなりました。

今回の調査では、このような歴史を経てきた大坂城に関連し、豊臣家を支えたであろう大名の武家屋敷と思われる遺構・遺物が見つかりました。

2. 調査成果

調査地周辺は大坂城の西側にあたります。これまでに公益財団法人大阪府文化財センターが発掘調査を行い、多くの成果を上げてきました。その中の一つに、平成 3・4 年度に実施した府庁建替に伴う調査と、平成 14 年度に実施した大阪府警察本部棟建替に伴う発掘調査等での、豊臣期大坂城二ノ丸大手口を逆コの字形に囲む堀の発見があります。

今回は、豊臣期大坂城二ノ丸大手口を逆コの字形に囲む堀のすぐ西側、いわゆる三ノ丸に相当する場所で見つかった屋敷地と思われる造成地と建物及び出土遺物についての調査成果を発表します。

(1) 屋敷の建設に伴う造成 (写真1)

調査区内で、上段・中段・下段の三段構成を成すひな壇状の造成地が見つかりました。上段は、調査区の北端と南端で部分的に見つかりました。中段は、調査区中央にあり、南北約25m、東西約33mを測ります。中段は概ね平坦であり、標高18mを測ります。この中段では礎石立ち建物跡が見つかりました。下段は、調査区東端から南端にかけて、L字形に見つかりました。

これらひな壇状の造成地は、徳川期に行われた大坂城再建時の盛土により埋められていたこと、盛土直下には多量の炭や焼土が見られたこと、出土した遺物はいずれも豊臣後期に属するものであることから、大坂冬の陣・夏の陣前後の時代のものと考えています。また、こうした造成地ができた背景には、慶長3(1598)年の東国諸大名の屋敷を伏見から大坂に移す普請が関係するものと考えられます。普請は、大坂城下の西側一画の住民を立ち退かせ、新たに大名屋敷地を造成したとするもので、今回見つかった造成地がその好例となるものと思われまふ。ただし、このようなひな壇状の造成は、これまでの周辺調査ではほとんど例がなく、当場所のような造成が一般的なものか否かは検討を要します。

各段の使い方については、上段は後世の削平を受けているため判然としませんが、中段は、礎石立ち建物が建てられています。下段は、現在調査中のため不明な点が多いのですが、火縄銃の玉がまとまって出土しました。その玉の中には、鑄バリが付いたままの玉があり、この場所で製作した可能性や工房等があったことも想定されます。

中段と下段の遺構面及び包含層からは、唐津焼・志野焼・備前焼等の国産陶器や中国製青花白磁等の輸入磁器を始めとする桃山陶磁器、漆器椀・下駄・箸等の多岐にわたる木製品、装剣金具の目貫といった多種多様な遺物が出土しています。また、火を受けて変色した陶器片や瓦等も出土しています。

(2) 屋敷建物

調査区中央、ひな壇状の造成地の中段において、東西に並ぶように建物跡が2棟見つかりました。西側の建物跡は、東西およそ20m、南北およそ15m、推定100坪を測る礎石立ち建物です(建物1)。東側の建物跡は、建物1と中段の際の間に建てられており、東西およそ4m、南北およそ15m、推定20坪の南北に長い建物と考えられます(建物2)。

建物1は礎石立ち建物ですが、ほとんどの礎石は抜かれていました。残された礎石は径20~30cm前後のものが多く、平らな面をもっています。また、南側に礎石が張り出している部分は、出入口に相当する可能性があります。さらに、建物跡の北辺と南辺には、3~5cm程度の大きさの玉石を帯状に敷いた箇所が見られます。なお、この建物があった場所には、大坂の陣に伴うと考えられる炭がほとんど見られないことから、大坂の陣の頃には、建物自体は撤去されていた可能性があります。

建物2は、現在調査中ですので構造の詳細は判然としませんが、竈^{かまど}が1基見つかっており、箸や漆器椀、蓋、折敷^{おしき}他の木製品が多量に見つかりました。また、瓦を使用した排水枥と思われる施設も見つかりました。この中から「扇に月丸紋」の家紋を持つ瓦が見つかりました。このような状況から、当建物跡は、台所のような機能を持つ施設であったことが想定されます。

これらの建物跡は、規模が大きく、玉石を敷く等から、大名屋敷である可能性があります。

まとめ

今回の発掘調査では、上段・中段・下段の三段構成を成すひな壇状の造成地が見つかりました。またその中段には、礎石立ち建物があったことがわかり、この場所が大名屋敷の一部であったことが推定されます。

豊臣秀吉が亡くなる慶長3（1598）年頃から、豊臣期大坂城の西側は、二ノ丸の堀外から概ね現在の谷町筋あたりまで、武家地として使われたと想定されています。豊臣秀吉は、愛息秀頼のために大坂城の守りを強固とするため、様々な改造を加えていきますが、その最後となるのが、慶長3（1598）年の武家地の整備と考えられています。またこの時には、主に東国に拠点を持つ大名たちが伏見城から大坂城の武家地へ移住するように命じられています。今回の調査で見つかった造成地や屋敷は、この時に造られた可能性があります。

周辺のこれまでの発掘調査成果でも、「扇に月丸紋」の家紋を持つ瓦や『さ竹内』と墨書された荷札木簡が出土していることから、豊臣家臣で常陸国を治めた大名「佐竹義宣^{きたけよしのぶ}」との関連が指摘されています。今回みつかった屋敷地も佐竹氏の屋敷に関連する可能性があります。

3月23日（土）に開催を予定している現地説明会では、ひな壇状の造成地や建物の検出状況を見ていただくとともに、大坂の陣に伴う炭層及び焼土面、徳川期大坂城再築に伴う盛土他から出土した遺物を展示します。

【用語解説】

- | | |
|-----|--|
| 普請 | 主に、土木工事のこと。 |
| 鋳バリ | 玉は、溶かした鉛を鋏（ヤットコとも）のようなものの先につけられた鋳型に流し込んで作る。そのため、鉛を流し込んだ際のバリがつく。本来はそのバリをきれいに削り取り製品とする。 |
| 唐津焼 | 16世紀末頃から、九州北西部で生産され始めた焼き物。釉 ^{うわぐすり} は灰釉を主とし、模様のない無地物、鉄黒で模様を描いた絵唐津 ^{えがらつ} 、白い長石釉をかけた朝鮮唐津 ^{ちようせんがらつ} 、ヘラで文様を彫り込んだ彫唐津 ^{ぼりがらつ} 等がある。 |

- 志野焼 16 世紀末頃から現在の岐阜県で生産され始めた焼き物。素地に、長石を砕いて精製した白釉を厚めにかけて焼かれる。釉肌には細かい貫入かんにゅうや小さな孔が多くあり、釉のかかりの少ない釉際や口縁には、赤みのある景色が出ることもある。
- 備前焼 日本六古窯の一つ。現在の岡山県で生産される。釉薬を一切使わず「酸化焰焼成」えんしょうせいによって堅く締められた赤みの強い味わいが特徴。
- 豊臣期大坂城 大坂城築城開始から大坂夏の陣による豊臣氏滅亡までを、特に豊臣期と呼称する。さらに、慶長 3（1598）年の三ノ丸造成工事等を境に、「豊臣前期」「豊臣後期」に区分する。
- 徳川期大坂城 徳川氏による大坂城の再築は、元和 6（1620）年から始まり、一期工事では東・北・西の外堀と西ノ丸等の建物の工事が行われた。寛永元（1624）年からの二期工事では内堀と本丸御殿や天守が、寛永 5（1625）年からの三期工事では南外堀と二ノ丸南部の工事が行われ、寛永 6（1629）年に完成している。
- 佐竹義宣 元亀元（1570）年に常陸国（現在の茨城県）の太田城に生まれる。父は「坂東太郎」ばんとうたろうと恐れられた義重よししげ、母は伊達晴宗はるむね（政宗の祖父）の娘である。豊臣秀吉の小田原攻めに参陣し、以降は秀吉の臣下となり、豊臣政権六大将の一人とも呼ばれた。秀吉没後の関ヶ原の戦いでは上杉景勝かげかつと共に徳川方に参戦しなかったため、家康より秋田への国替えが命ぜられた。大坂冬の陣では徳川方として参戦し、今福の戦いで大きな戦果を上げた。寛永 10（1633）年、江戸神田屋敷にて 64 歳で死去。